

(ページコラム 11) 大阪のダブル選挙

先月末に、大阪府知事選と大阪市長選のダブル選挙があつて、橋下氏率いる「維新」の候補がいずれも圧勝したことは周知のとおりである。

半世紀以上も前に大阪を離れたが、生まれてから高校卒業までの子供時代を大阪で過ごしたので、私もかなりの関心を持ってニュースを見ていた。

私の子供時代、年代で言えば、概ね昭和 20 年代頃までは、大阪は日本経済の中心地であった。当時の大人たちが、政治の中心は東京だけれど、「経済は大阪だ」というような強い自負心をもっていたことは、子供心にもしゅうぶん感じられた。

ところが、自由主義経済とは建前のみで、戦中に始まり戦後に続いた、いわゆる「1940 年体制」のもと、政府がどんどん肥大化したために、大阪で生まれた大企業までが、中央官庁との頻繁な接触なしに成長することは難しくなり、本社機能を東京に移すなど、大阪の経済的地盤沈下が進んだ。

かくして、近年では、大阪も並みの一地方都市にすぎなくなり、橋下氏が知事になった数年前までは、大阪の政治が、東京のマスコミすなわち全国レベルのマスコミで取り上げられることなど、ほとんどなかった。橋下氏の前の知事の名前は？とか、平松氏の前の市長の名前は？などと問われても、大阪以外の人で答えられる人は少ないだろう。

ところが、橋下氏が大阪府知事になったのちは、彼の発信力が凄いので、大阪の政治の動きが全国レベルのマスコミに盛んに登場するようになった。

彼が知事としてやったことの評価や、このたびの市長選挙で掲げた政策については、もちろん賛否両論があろうし、私がこのページコラムで安易な判定を下す気もないが、大阪が全国から注目されるようになったこと自体は、現在、大阪に住んでいる人たち、とりわけ長くそこに暮らしている人たちに、「大阪の復権」のシンボルとして心地よく受け止められていることは間違いあるまい。

そして、彼と彼の党派の松井氏を、市長と知事に選べば、更に大阪の地位を上げてくれるのではないかと多くの大阪人が期待したのが、今度の選挙結果ではないだろうか。

「大阪都」構想というのも、中身より先に「都」という名称が大阪人に「東京と対等」だと思わせて、心地よく響いたに違いない。もともと、明治から昭和の戦中まで長い間、東京も大阪も、京都とともに「府」だったのであり、戦時中のどさくさの中で、たぶん、軍国主義政府の一方的な思惑から、東京だけが「都」にされ、戦後にも、そのまま引き継がれたにすぎない。だから、「都」という制度が、そんなに良いものか否かはわからないが、その名称が大阪人にはアピールする要素を持っているのである。

大阪市長なんて、何十年も助役上がりばかりで、よその人はもちろん、大阪市民さえその氏名もろくに知らない無名の存在だったのが、全国に名を轟かし、国政さえ動かしそうな人物が市長になったのだから、大阪人の多くは「何をやってくれるか」とわくわくしていると思う。大阪市出身の私にはその気持ちがよくわかる。